は少なくない。たしかに、筆者が指摘するように、福地は官よりも民を重視し、新聞記者の役割を重んじて、政府・政治の役割を限定しようと考えた。こうした福地が、のちには立憲帝政党を結党して、政府の主義をもってその綱領とするようになったのは、なぜか。本書の冒頭で示されているような、福地に対するネガティブなイメージを完全に覆すには、本書の分析対象としていないこうした事象をも、検討する必要があろう。また、福地がいかに平民を重視し、「言文一途」の重要性を説いたとしても、『東京日日新聞』の社説にはなかなか反映されず、口語体が全紙面において使用されるようになるのは、大正期を待たねばならず、福地は同紙を小新聞に改変することもなかった。福地の言説が、どこまで実地に移されたのかも、詳しく検証されなければなるまい。

福地は、きわめて政治意識の高い新聞記者であり、思想家であった。その意味で、木戸との関係に代表される政治史の文脈、そして、草創期から新聞事業に携わってきたジャーナリストとしての軌跡、さらには「輿論」や「国民」概念を論じた思想家としての業績など、多面的な評価が必要となる。今後、筆者の研究がさらに発展し、こうした学問領域を超えたダイナミックな福地像が描き出されることを期待したい。

（慶應義塾大学教授）

商兆琦著

『鉱毒問題と明治知識人』

（東京大学出版会・二〇二〇年）

神谷　昌史

一

私事からはじめて恐縮だが、以前ある人名事典に執筆したときのこと。事典が出版され、担当した項目を見て驚いたのは、書いた覚えのない一文が最後に付け足されていたからである。いわく、「平成に入ってエコロジーの視点から見直しが進められている」。事典項目の当該人物は、ユニークではあるが結局は秘教的セクト主義に閉塞したとしか思えず、「エコロジーの視点から」の再評価だの、その人物が残した得体のしれない曼陀羅だのは胡散臭いだけだというのが私の評価だったので、断りもなく正反対の文章が付け加えられていたことには不快感が拭えなかった。そんなこともあって、それ以前からあまり関心が持てなかった「エコロジーの先駆」や「近代文明を根源的に批判したいのちの思想家」などの評価がなされるタイプの思想家はますます敬して遠ざけるようになった。

本書が上梓されてしばらく手に取らなかったわけも、「鉱毒

問題」といえば田中正造であり、田中正造といえば私にとっては先の思想家の代表格のようなものだったからだ。正確に言えば先のような視点からの研究や評価がされがちな思想家だからだ。しかし鉱毒問題と「と」で結ばれているのが「明治知識人」である点が気になり、大きな書店でページをめくってみると、「序章」に次のようにあった。「これまでの田中正造研究には、二つの問題がある。まずは、正造の思想を「現代的な思想」として語ることである。このために、正造の思想を彼の時代の文脈に置き直す作業がおろそかになった」（三頁）と。続いて足尾鉱毒事件＝田中正造という問題設定は「視野が狭すぎ」、田中が祀り上げられてしまうとしている。序章を読み終えたときには、手にする前の先入見は霧消していた。

二

さて、本書は次のような構成をとっている。

序　章　本書の視点
第一章　田中正造の虚像と実像
第二章　田中正造の思想世界――特に儒学との関連について
第三章　「情」と「智」の相剋――勝海舟と福沢諭吉
第四章　「社会」と「国家」のはざまで――島田三郎と陸羯南
第五章　「近代」への反逆――内村鑑三と幸徳秋水
終　章　「近代」の問題と明治知識人

序章では、先にみたように、従来の研究が当時の歴史的文脈を無視しており、田中正造の思想をあまりに現代的なものとして「超歴史的」に評価し過ぎていると指摘する。研究者たちは歴史的文脈のなかに田中やその思想を置いて理解しようとするのではなく、自らが生きる「時代風潮を投影し」、結果的に田中を「神格化」しているのである。そう指摘した上で、本書の課題を、田中の「人間像と思想像を実証的に明らかにすること」と、当時の知識人たちの鉱毒事件への対応がどのような「知的背景」より生じているのかを比較・分析することとのふたつであるとしている。そうした作業を通じ、明治知識人がどのように「近代」を受容し、また乗り越えようとしたのかを解明したいというのである。

取り上げられる知識人は、田中正造以外に、勝海舟、福沢諭吉、島田三郎、陸羯南、内村鑑三、幸徳秋水の六名である。彼らはすべて、「近代化」「文明化」をいかにして達成するかという問題意識を持っていた点で共通するとされ、「世代順に、「天保の老人」、「中間世代」、「明治の青年」という三つの組に分けた上で、二人一組の形で」検討されていく。

本書の原型となった博士論文では「田中正造研究」と「明治知識人研究」の二部構成となっていたようだが、本書ではそのような明確な区分けはなされていない。右に挙げた章立てに明らかなように、第一・二章が田中正造について、第三～五章が

明治知識人についてとなっており、分量的には後者が前者の二倍強である。

第一章では、先行研究の問題点を指摘した上で、「より客観的な正造像を構築」しようと試みている。先行研究の問題点については、序章よりさらに踏み込み、田中と同時代の思潮とのつながりや、他の思想家との比較検討の不足が挙げられる。「歴史自体」や田中の思想自体が解明すべき課題とされているのではなく、研究者の田中に対する「共鳴」「感情移入」からする「拡大解釈」が横行していると批判する。著者はこれまでの「正造像」には多くの問題があるとし、「より客観的な正造像を構築するため」同時代人の田中正造評を紹介し、あわせて田中自身の自己認識も検討する。そうした作業により浮かび上がるのは、「精神家」であり「行動家」としての田中像であるとされる。

第二章は、儒学の影響を強く受けた田中の思想世界に迫ろうとしている。その際、まず「無学」という言葉を手がかりとする。田中は自らの「無学」を強調しながら、「学者」を批判し（「知識ノ奴隷」）、社会実践を通じて「真の知識」に到達し獲得することが重要であるとした。

明治知識人の鉱毒問題についての議論を検討することにより「明治後半期の思想地図を描き出す」試みは、勝海舟と福沢諭吉を取り扱う第三章より始まる。勝は政治をいかにうまく運営していくかを重視しており、そのためには世態人情に通じていなければならない。鉱毒問題についても「人心の安定」という観点から考えており、放置すれば不満が爆発して「民心遂に離散」してしまうと警戒したという。「適切な状況判断に基づいて」「情緒的な人間・社会関係を維持する」ことが肝要だとするのである。一方福沢は、政治においては「人情」といった「非合理的な要素をできる限り排除すべき」とし、「鉱毒問題を「智」の立場から捉え」た。「誠」という道徳的要素を重く見た勝と、「惑溺」を克服するために「疑」を必要とした福沢という対照的なふたりは、社会秩序の形成についても同様であり、勝がエゴイズムの解消を通じての秩序形成を考えたのに対して、福沢はエゴイズムを「積極的に転換すること」で秩序を形成しようとしたとされている。

第四章では、一八五〇年代生まれの島田三郎と陸羯南とが対比して論じられる。両者は「文明開化の時代に自己を形成し」、「新式教育を受け」るとともに「漢学を学ん」でいる。陸が西洋文明を「抵抗を通じて」受容しつつ日本の伝統を重んじたのに対し、島田は西洋志向が強く、西洋思想を「伝統思想と関連づけて日本に導入しようと」した点で大きな違いがあった。鉱毒問題については、島田は当初「中立」的立場であったのが、政府の消極的でうわべだけの対応を問題視するようになった。その前提として、「貧富ノ間」の「一大戦争」を食い止めねばならないとする「社会改良主義」があった。陸も政府の「西洋主義」路線が格差を拡大させ「社会の分裂、道徳の堕落」を招

来しているとし、鉱毒問題をはじめとする諸問題は「国家的社会主義」によってしか解決され得ないと主張している。

最後の組み合わせは第五章の内村鑑三と幸徳秋水である。内村は「日本的伝統を受け継」いだキリスト者であり、幸徳は「儒教倫理に根ざした」社会主義者として対比される。内村は鉱毒問題は「拝金主義」によって生み出された「人為的災害」であり、この問題を根底から解決するには人心の改良が必要だとする。社会が腐敗し「亡国」状態に陥っている要因を内村は「道徳の堕落と宗教心の不在」に求めるのに対し、幸徳は社会制度の問題と捉え、制度の改革を訴える。また制度だけでなく制度を支える人々の「公徳心」の改革も唱えている。個人主義の弊害が制度や道徳にも及んでいるため、生産手段の共有や公徳心の涵養によって乗り越えることを唱導しているのである。

三

本書の評価できる点は、まず第一に、これまで何度も繰り返してきたように田中正造の脱「神格化」を行っている点である。近年においても田中について「二一世紀の思想家」、「「いのち」、「自然」、「公共」、「共生」などの先駆的な思想」などとする研究が後を絶たない。本書はそうした研究動向を慎重に批判し、田中の思想を当時の文脈において「実像」を明らかにしようとしている。とりわけ第二章での、田中のなかで儒学思想がどのように血肉化しているのかを丁寧に論じているところは多くを教えられた。

第二に、鉱毒問題について、報道分析でもなく思想家の個々の言説や思想の検討でもなく、知識人たちの言説を並べて比較し分析している点である。その際、「日本近代化の最初の「破れ目」としての足尾鉱毒事件」を手がかりに、彼らの政治観や秩序観などに踏み込んでいき、知識人たちが「近代」をどのようにとらえているのかを解明しようとしているところには惹きつけられるものを感じた。これは「あとがき」に記されている、「前近代」的な農村に生まれ、「中国の急速な経済発展」のなかで「近代化がもたらす巨大な歴史的変化を目睹」したという、まさに〈恰も一身にして二生を経〉ている著者自身の切実な問題意識に因るものであろう。

四

最後に、疑問に思ったことや考えさせられたことについて少し記しておきたい。

まず、勝海舟や福沢諭吉をはじめとする六名の知識人たちが世代順に組み合わされて分析検討されていることに関して、同世代として括られているその組み合わせは果たして妥当かという疑問である。さきにも見たように、勝海舟と福沢諭吉は「天保の老人」、島田三郎と陸羯南は「中間世代」、内村鑑三と幸徳秋水は「明治の青年」とされている。「近代日本において、はじめて「青年論」と「世代論」とが登場したのは明治二〇年代

であ」り（岡和田常忠）、知られているように徳富蘇峰が自らや青年たちを新時代の担い手であると宣言するため、「天保の老人」と「明治の青年」という世代概念を提示した。そのため通説的には「明治の青年」は徳富蘇峰（一八六三年生）をはじめ、三宅雪嶺（一八六〇年生）、山路愛山（一八六五年生）といった一八六〇年前後に誕生した世代をあらわしているとされており、一八七〇年前後の明治生まれの青年はその次の世代とされている。本書で取り上げられている知識人では、幸徳秋水（一八七一年生）はいわゆる「明治の青年」には入れにくく、むしろ「中間世代」とされている陸羯南（一八五七年生）の方が適当なように思われる。勝と福沢、島田と陸、内村と幸徳という組合せと対比自体は有効だと考えられるが、「天保の老人」「中間世代」「明治の青年」というカテゴリーは妥当なのだろうか。また世代にこだわるのであれば、松沢弘陽氏の明治社会主義の前世代・中心世代・後世代の区分や、飯田泰三氏の明治ナショナリズム先駆世代・明治ナショナリズム中心世代・大正知識人前世代・大正知識人中心世代、のように新たな世代区分を創出するなり、本書で言うところの「天保の老人」世代や「明治の青年」世代について説明するなりが必要だったのではないか。

次に、評者は島田三郎についてはほとんど知るところがなかったため、本書での分析には多くを学ばせていただいた。少し気になった点としては、島田のキリスト教信仰と鉱毒問題への対応の関係である。もう少し広げていえば、島田の信仰と社会問題・政治活動との関係ということになる。著者は島田のキリスト教信仰について、一五九～一六〇頁などで触れてはいるもののあまり重視はされていないようだ。著者は島田の信仰が「内村鑑三のそれとは異質であった」としており、島田はキリスト教徒ではあるが彼の信仰は社会問題への対応や政治活動とはさほど深いつながりはないと考えておられるように見える。しかし、内村の信仰は日本のキリスト教においてかなり異質なものであるだろうし、それをもって島田の信仰と彼の政治思想や社会思想とのつながりが薄いとは言いがたいように思う。もう少し島田のキリスト教信仰と政治活動や社会問題への関わり、さらには思想との関連について考える余地はないだろうか。あわせて、西洋派知識人である島田が「儒学的な言葉を多く用いている」点は「語彙のデータベースとしての儒学」（河野有理）の例として面白いように思われた。

内村鑑三については、彼が鉱毒問題に関心を持って関わり始めた時期と、彼のキリスト教信仰に変化が現れ始める時期とはほぼ重なり合っているように思われる。国内外での社会の改革の動きへの期待とそれに対する失望が、楽観的な進歩主義からの変化を促すことが従来の研究で指摘されているが、もしそうであるとすれば、鉱毒問題と内村の思想との関わりは、より動的なものとして描き出せるように思えた。

より広がりや深みを持たせることは可能と感じられたが、それは本書が今後の田中正造や鉱毒問題の思想史的研究のうえで

必読となる非常な労作だからである。むしろ、本書から示唆を受け、さらに深めていくべき問いを与えられたようにも思う。

（滋賀文教短期大学教授）

今高義也著
『内村鑑三の世界像――伝統・信仰・詩歌』
（ぺりかん社・二〇二〇年）

長野　美香

一、アプローチの独自性

内村鑑三という巨大に過ぎて一筋縄ではいかない人物の全体像を摑もうとするのは、きわめて難儀な営みである。巨人のどこに取りつこうとするかによって見え方も異なってくるが、それらを総合しようとすると、また像がぼやけてきて焦点が定まらなくなってしまうようなところが、内村という人物にはある。結局はぼやけている部分を地道にひとつひとつ埋めるべくなにか手段を探していくしか、内村に近づく方法はないのだろう。

本書は、この気の遠くなるような営みに、わけても地道で堅実な方法で取り組んでいる。その最たるものが、内村の蔵書に残された内村自身の書入れから、内村の信仰上の重要事や伝統思想との関わりを探り、それが従来いわれてきたことと合致するか否かを確認する方法である。

自分自身のことを省みると、若い頃になにげなく線を引いたり、メモを書き込んだり、マークをつけたりした本を後年に開